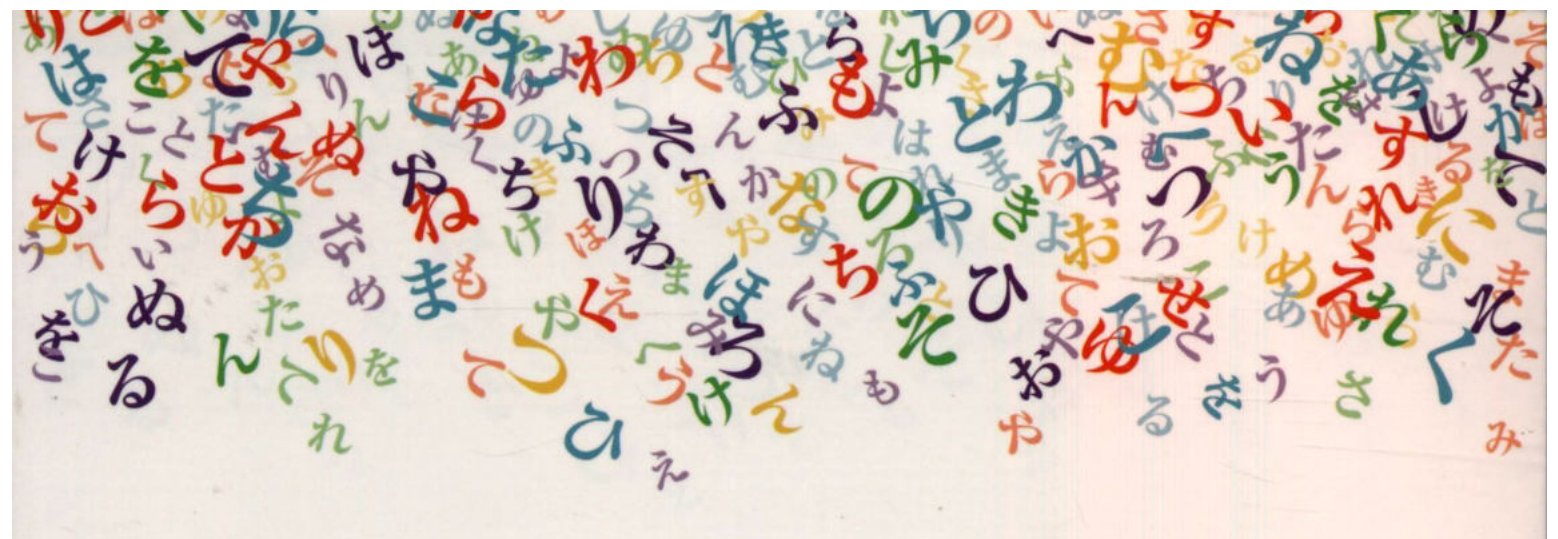




日本語本質論

翻訳テキスト分析が映し出す姿

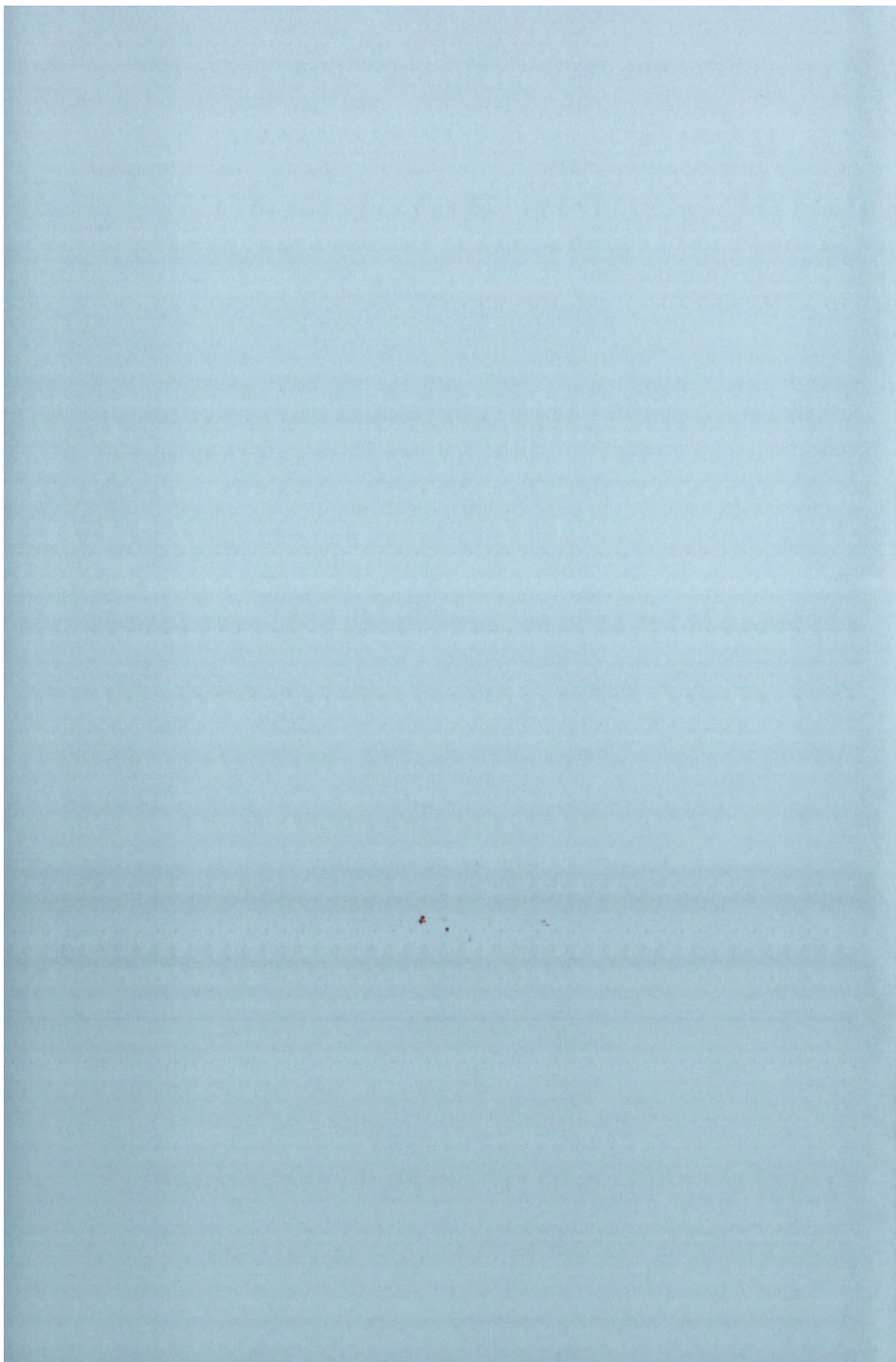
『銀河鉄道の夜』『キッチン』
『涼宮ハルヒの憂鬱』ほか、

日本の文芸作品で、翻訳される表現、されない表現を解き明かし、
そこから日本語文化の本質を鮮やかに映し出す初めての研究。

明治書院



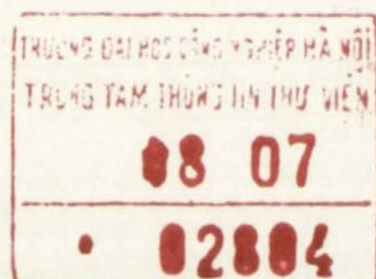
明治書院



日本語本質論

翻訳テキスト分析が映し出す姿

泉子・K・メイナード 著



明治書院

50 20

• 85806

はじめに

日本語研究では、これまで日本語の特徴について数多く論じられてきた。表記、語彙、文構造、談話構造、レトリックなど、その考察範囲は広い。筆者も日本語の諸相に関連した研究を重ねてきたのだが、本研究は、筆者のポピュラーカルチャーの日本語の分析（『ライトノベル表現論』明治書院 2012、『ケータイ小説語考』明治書院 2014、*Fluid Orality in the Discourse of Japanese Popular Culture*, John Benjamins 2016）と、それに基づく哲学的考察（『話者の言語哲学』くろしお出版 2017）に続く研究である。筆者は一連の研究で、言語の主体としての話者が、いかに豊かな日本語表現を生み出しているかを探究してきた。本書では、表現性に満ちた日本語の根源に発見できるその本質をテーマとして、より深く考察したい。

本研究では、翻訳テキスト分析というアプローチを試みる。英訳を中心とした翻訳テキストを分析し、日本語表現がどのように翻訳されるか・されないか、特に原作の日本語の意味が翻訳文に十分に反映されない点を指摘し、それを通して日本語の本質を確認する。もっとも、翻訳という行為にも複雑な問題が絡んでいる。翻訳の可能性と不可能性の論議に見られるように、そのプロセスにおける課題は無視されてきたわけではなく、これまでもその問題点や限界性が論じられてきた。ただ、それらの言説は、起点言語テキストと目標言語である翻訳テキストを広範囲にわたって分析することなく、主張され続けてきたに過ぎない。現在でも多くの事例を分析した研究は、ほとんど存在しないのである。本研究では言語表現に焦点を当てながら、翻訳で失われる意味をより広く深く検証するために、幾つかの作品の原作と対照しながら翻訳テキスト分析を試みる。

周知のように、日本語話者が駆使する各種の創造的な表現の意味や表現性は、必ずしも他の言語に充分反映されるわけではない。翻訳上の意味のずれを明らかにする作業は、日本語を広い視野から、そして、他者の視点から考察するというプロセスであり、それは日本語を深く理解するための条件でもある。外国語に充分反映されず伝わらない意味にこそ、日本語の特徴を発見することができるからである。

その過程で浮き彫りになる日本語の本質とは、一連の言語操作の根底に横たわる空白の場における空白の話者の存在である。ここで言う空白とは消極的な世界ではなく、そこに大きな積極性と可能性を秘めたものである。場には豊かな状況が具現化し、それを感じ受ける者として豊富な様相を備えた話者が潜在する。そして日本語とは話者が自分を相手に提示するために、創造的に情感を含めて表現し演出するリソースとしてある。それは、情報を伝えて相手を説得するというより、情的な思いを共有するための手段として機能する言語である。日本語はまた、スタイルや話者のキャラクター提示を可能にするキャラクター・スピークなどの、バリエーションに富んだ言語でもある。

昨今、グローバル化した情報社会において、日本のポピュラーカルチャーを含む広義の文芸作品が、外国語に翻訳されるケースが増加している。そのように紹介され消費される日本語文化は、日本語の表現性を正確に伝えているのだろうか。日本語の本質は理解されているのだろうか。もしそうでないなら、どのような意味で差異が生じているのだろうか。日本、日本人、日本文化は世界の中で充分理解されることなく、ある意味、誤解されたままにあるのではないだろうか。

翻訳というプロセスで失われがちな日本語の意味は、いわゆる主観的な意味、陳述、辞的表現、または、モダリティと言われる部分である。しかもこれらの意味は間主観性に支えられ、常に読み手や聞き手としての相手やコンテキストに影響を受ける。主観的な情感は命題の情報を包み込みながら、話者の視点、発想・発話態度、情意・情緒などの深い心情的な意味を提供する。そのような豊かな表現性は、日本語の持つ美しさと、日本の文化に見られる審美的な価値観につながっている。同時に書き手や話し手としての話者は、どのように

自分を演出するかという決断に迫られ、スタイルやバリエーションを個性的に選択し運用する。その多様性は、日本の社会に根付く人間関係のあり方に動機付けられているのだが、その意味や表現効果は翻訳テキストでは十分に伝えられない。

さらに翻訳の過程で失われる側面として忘れてならないのは、話者の創造性である。創造的な表現であればこそ見逃せない表現性も、主観的な意味と同様に失われがちになる。例えばミステリーの翻訳では、読者が物語のあらすじを追うだけなら、原作の表現性が充分翻訳されなくても欠如していると意識されない。いや、むしろあらすじ以外の複雑な情感や話者の個性は、読者の立場から見れば邪魔になるだけかもしれないのである。

翻訳という現象にまつわるさらに深刻な問題は、英語に翻訳するプロセスで英語に反映されない意味の欠如を意識することのないまま（英語に存在しないのであるから）翻訳テキストとしてグローバルな舞台に紹介されることである。そして、このような日本語作品の翻訳テキストに内在する決定的な意味のずれは、意識されないまま世界文学・文化の一部となっていく。それは、喪失を喪失と感じないという翻訳現象がもたらす根源的な限界性に他ならない。本書では、このような、ともすれば翻訳という過程で生じやすい、原作テキストと翻訳テキストとの間の意味の差異性が、どこに観察できるかを検証しながら考察し、それを鏡としてそこに映し出される日本語の姿を詳しく論じていく。

筆者は長年アメリカに住み、常に日本語と英語を使って生活し、両言語での執筆を続けている。その日常の中でも、日本的な気持ちが伝わっていない場面に遭遇する。個人的な人間関係だけでなく、ポピュラーカルチャーや文学、外交関係、政治問題、学術論文、広範囲のメディアなどにおいても観察される。その場合問題となるのは、日本語の本質として、日本人のコミュニケーション方法に深く根付いている感情や態度である。それらの意味は英語で表現できないことが多く、また、たとえ英語に翻訳したとしても無視されがちである。情報の交換はできていても情的な意味のずれが生じ、深いところでつながっていないことがある。

このような心情は、グローバル化した世界の広い地域で異なった言語を使い、独特の文化の中で生きる多くの人々が経験していることではないだろうか。異言語間のコミュニケーションでは、外国語で表現できないことを言わなければならないという、矛盾した行為が必要とされる。その文化や言語の根底に潜む最も大切な意味は、それぞれ異なる価値を伴っていることが多いため、伝わり難いと言える。私たちはそのような困難に直面する時、翻訳にまつわる言語間の差異性と、意味のずれをより強く意識させられる。それは、意味のずれが、母国語が外へ出て他の言語と接触する過程で、より鮮明に映し出されるからである。

ところで、歴史上、最も真剣に日本語と英語を比較することを余儀なくされたのは、幕末から明治へという日本の近代化の渦中に身を置いた、海外への留学経験者たちだったのではないだろうか。筆者が勤務するニュージャージー州立ラトガース大学 (Rutgers University) は、アメリカ独立前の1766年に Queen's College として創立され、その後 Rutgers College となり、さらに現在のような州立の総合大学となったもので、全米で8番目に古い大学である。実は、ラトガース・カレッジには、日本と交流の歴史があり、1860年代後半から1870年代にかけて、20名近くの日本人留学生在籍していたのである。日本語と英語という言語文化の間に身を置いた幕末の若者たちは、侍としての生活からアメリカ東部の大学生としての日常を経験することになり、日夜、翻訳というプロセスに直面した。そのカルチャーショックは、相当のものだったろうと想像できるのだが、その頃の事情を語るものとして、現在に語り継がれる日下部太郎 (八木八十八) の悲話がある。

越前藩の武家に生まれた太郎は、藩主選ばれて米国留学の命を受け、1867年に22歳でラトガース・カレッジにやって来る。大学ではその秀でた才能を発揮したものの、過度の勉学のため結核を患い、1870年4月13日、卒業を目前にして他界してしまう。しかしラトガース・カレッジは、その年の卒業生名簿に太郎の名を加えたのみならず、米国の最優秀卒業生に贈られるファイ・ベータ・カッパ賞を与える。その賞は、翌年の春、太郎に特別にラテン語を教えたラトガース・カレッジの先輩であるウィリアム・E・グリフィス (William

Elliot Griffis) によって、はるか遠い福井の太郎の父親のもとに届けられた。現在もなお、大学から遠からぬウィロー・グローブ墓地 (Willow Grove Cemetery) には太郎の他、6名の志なかばにして異郷の土となった日本人の若者たちの墓標が立っている。

2020年は、太郎の没後150年にあたるのだが、先日、筆者は福井出身の友人と墓前に立った。墓地の一角の小さな区画、その向かって右側のオベリスク形の墓碑には、「大日本越前日下部太郎墓」と、薄れてはいるが、日本語の文字が読みとれる。アメリカに留学した日本人の中には、洗礼を受けてキリスト教信者になった者もいたのだが、太郎は周囲のプレッシャーに堪え、最後まで待っていたのだそうだ。やはり、文化的な差異性は人の心を蝕み、異文化間に起きる苦悶を強いる。

今、世界における日本語文化の宿命を思う時、太郎や幕末の留学生たちが経験した言語や思想の差が何であったのかを問うことは無意味ではない。それは、日本語文化には翻訳してもしきれない本質があるという証であり、異言語・異文化の間に認められる、埋めることのできない溝の深さを示しているからである。

本書では翻訳行為の結果として入手できる翻訳テキストに焦点を当てることで、異なった文芸の諸相と日本語の談話における話者のあり方を探求する。筆者はそのプロセスを通して、日本語文化における空白の場に位置する空白の話者がいかに具現化するかを追いつつ、その本質に迫りたい。翻訳される外国語を、日本語の本質を照らし出す一つの灯として利用することで、ぼんやりしたものや陰の中に潜むもの、そしてむしろ日頃意識しない何かが映し出されるものと思う。

本書の出版にあたり、プロジェクトの前半では久保奈苗さん、後半では社長の三樹蘭氏に大変お世話になった。『ライトノベル表現論』『ケータイ小説語考』に続き、今回も、創業123年という伝統ある明治書院さんにお世話いただいた。日本語学における筆者の学問上の冒険をあたたく受け止めていただき、本当にありがとうございました。

最後に、三回のアメリカ留学を応援してくれた亡き父母、組谷勉・春江と、長年にわたりアメリカ生活を共に楽しみながら、サポートし続けてくれる夫のマイケル (Michael L. Maynard, Ph.D.) に感謝の意を表したい。

2018年12月

ニュージャージー州、ハイランドパークにて

SKM